

ドストエフスキイの「微笑」

【H.ドーブ撮影、1876年】



ドストエフスキイの「微笑」

〔H.ドース撮影、1876年〕



今回紹介する写真は、ドストエフスキイが55歳の時、ペテルスブルクの写真家ニコライ・ドースによって撮影されたものです。この時二枚の写真が撮影されたので、それらを並べて掲載しておきます。これら二つを比較するのも興味深いのですが、今回は胸部から上の肖像写真に焦点を当てたいと思います。と言うのもここには、彼の微かな「微笑」が映し出されているからです。ドストエフスキイの肖像画や写真の中でも、殆んど唯一と言ってもよいでしょう。もう一枚の写真にも微笑の影がなくはないのですが、私たちが取り上げる写真が彼の微笑を、微かではあれ、確かに捉えていることは疑いありません。しかもこの微笑は、ドストエフスキイの透徹した精神を映し出す微笑と言うべきものであり、遙か遠くの天上の光を見つめるような視線と相俟って、いつの間にか静かに私たちの心に沁み入ってくる力を持つように思われます。彼もこの写真を気に入っていたようです。

皆さんは誰かある人のイメージを、如何なる表情で心に留めているのでしょうか？ 真面目な顔、謹厳実直な顔、静かに瞑想する顔、ふざけた顔、だらしのない顔、とぼけた顔、狡そうな顔、阿呆そうな顔、賢そうな顔、気取った顔、怒る顔、悲しそうな顔、笑顔、等々・・・改めて友人や知人を思い浮かべてみると、私たちが顔の表情の内に、その人の内面を相当読み込んでいることに気づかされます。そしてドストエフスキイの場合、私たちが彼について抱くイメージとは、今までここに紹介をしてきた写真や肖像画もそうでしたが、まず大部分は物思いに沈んだ、深刻で奥深い精神性を湛えた表情ではないでしょうか。

私も長いことドストエフスキイと言えば、ペローフの肖像画（研究会便り・6回目）や最後の肖像写真（同5回目）などが「ドストエフスキイ」であり、彼が笑うこと、微笑むことなどは想像もつきませんでした。これはそのまま私のドストエフスキイに向かう姿勢と、彼についての理解の在り方を反映するものであり、その限界を示すものだったのです。

しかし年齢を重ねるうちに、またドストエフスキイとの取り組みが長くなるにつれ、先に見た二十代の頃の瑞々しい肖像画や（研究会便り・7回目）、今回の微かな微笑を帯びた写真にも焦点が当たってくるようになったのでした。

さて今回の肖像写真が撮られた1886年という年ですが、1884年ドストエフスキイは『未成年』を完成させ、妻アンナを実質的な経営者として自らの作品を出版し、雑誌『作家の日記』（1886-7）を世に送り出しつつある時であり、大きくは遺作『カラマーゾフの兄弟』（1879-80）に向けた準備期にあると言ってよいでしょう。この頃の彼が取り組んでいたテーマを見てみると、注目すべきことに『カラマーゾフの兄弟』で大きな問題となるテーマが、既に『作家の日記』の随所に見受けられます。「偶然の家族」のテーマ、「受難の幼な子」のテーマ、「神を宿すロシア民衆」のテーマ、「降神術」や「悪魔」のテーマ、「自殺」のテーマ等々・・・これらはどれもが皆、深刻この上ないテーマで、遺作『カラマーゾフの兄弟』に流れ込んでゆきます。殊に『カラマーゾフの兄弟』に至ると、この作品のブラック・ホールとも言うべきスメルジャコフが、「受難の幼な子」の極北に位置する存在として登場してきます。投げ込まれた理不尽で醜悪な運命と、それに対する復讐劇とその末の自殺など、この作品と向き合う時、皆さんはスメルジャコフが示す「闇」の深さにたじろぎ、この存在の、そしてまたこの作品のどこに「光」を見出すべきか、途方に暮れさせられるに違いありません。

しかし皆さんは、たじろがされ途方に暮れさせられつつも、このブラック・ホールたる存在を扱うドストエフスキイその人が、今回の写真のような微かで静かな「微笑」を浮かべる人であったことを思い起こす時、改めて「闇」の中に「光」を見出そうという心、勇気を与えられるに違いありません。今回の研究会便り（11）で、私の一連のカラマーゾフ論は終わりとなります。殊にここ六回は、先の『カラマーゾフの兄弟論』に続いて、スメルジャコフの「闇」との取り組みを課題としてきたのですが、その道程で、H. ドースが捉えてくれたドストエフスキイの「微笑」が、一つの導きの星となってくれたことを記しておきたいと思います。